

高層ビルから見る東京の夜景だった。きれいだった。それは、長女のインスタグラムの投稿だった。こんな写真を見せられると、何かあったかと思ってしまう。

娘は、大学を卒業し、そのまま東京で就職した。この春で、社会人2年目を迎える。職場であるオフィスは、新宿の高層ビルの33階にある。夜景は、そこからのものだった。どのくらい高いかは、一度行ったことがあるためわかる。会社が休みの週末に、職場見学ということで、娘に案内してもらった。オフィスには入らなかったが、ビルの高さはよくわかった。

後日判明したことがある。その日は、娘がオフィスを閉めたのだった。最終退庁者になったということである。やはり、何かあったのである。道理で、写真を撮った部屋が暗かったわけである。そのため、ビルの向こうの夜景が鮮やかに浮かんでいた。

自分でオフィスの明かりを落とし、カギを閉め、何を思ったのだろう。そういえば、自分もよく最終退庁者となっていた。それが常態化していた時期もあった。今思えば、決してよくはない。だが、仕事が多かったことも事実である。

彼女は、どうやら仕事が忙しいらしい。それは、わるいことではない。まだ2年目である。覚えなければならないこと、経験したほうがいいことがたくさんあるだろう。最後にオフィスを後にすることができるのが、2年目になったということか。

家人も、よく最終退庁者を務めていた。それだけ、帰りが遅いということである。以前ならば、よくがんばっているということになっていたかもしれない。ところが、今では、がんばっているのではなく、よくないことと思われている風潮がある。

働き方改革というと、勤務時間が終わったら、早く帰ることというイメージがあるかもしれない。事実、勤務時間の長さが問題になることがある。たぶん、娘の会社では、仕事の特性上、勤務時間が長くならないようにするのがむずかしい時期もあるのだろう。彼女の場合、帰りは遅いが、その分、出勤も遅くなっている。通勤ラッシュの時間帯を避けられているはずなのだが、意外と電車は混んでいるそうである。それだけ、出勤時間、退勤時間が多様化しているのだろう。

昔のことだが、最終退庁者としてカギを閉め、真っ暗な校舎を眺めながら、悲哀を感じたことがあった。娘も同じようなことを思ったのだろうか。それとも、充実感を味わったのだろうか。

この前は、娘の誕生日だった。ラインで、メッセージを贈った。そこには、ある言葉を入れた。「若いときに流さなかつた汗は、老いてから涙となる」ぜひ、多くの若者たちに贈りたい言葉である。若者たちのそれぞれの活躍を祈らずにはいられない。